

第2章 名所・旧跡と伝統工芸

—— 歴史を語る史跡と今に息づくヤチムンと花織 ——

座喜味城跡

15世紀の初期、護佐丸によって築城された座喜味城は第二次大戦中は日本軍の高射砲部隊の陣地であった。よって沖縄の多くの史跡がそうであったように米軍の攻撃にさらされかつての姿を失った。戦後も引き続き米軍の通信基地として継続使用されたが、1974年に同地は開放される。1972年の日本復帰に伴い琉球政府指定史跡から国指定史跡となった。1973年10月、村はいち早くその環境整備事業に着手し13年の歳月をかけて復元され、1987年9月27日にその完了祝賀会が催された。



72 修復前の座喜味城跡のアーチ門。



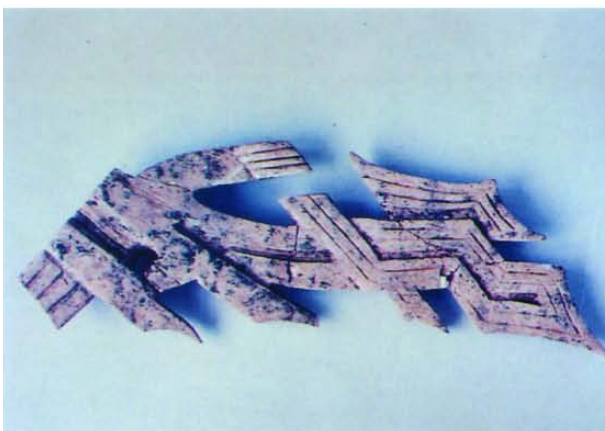
73 13年の歳月をかけて復元修復された国指定史跡座喜味城跡。



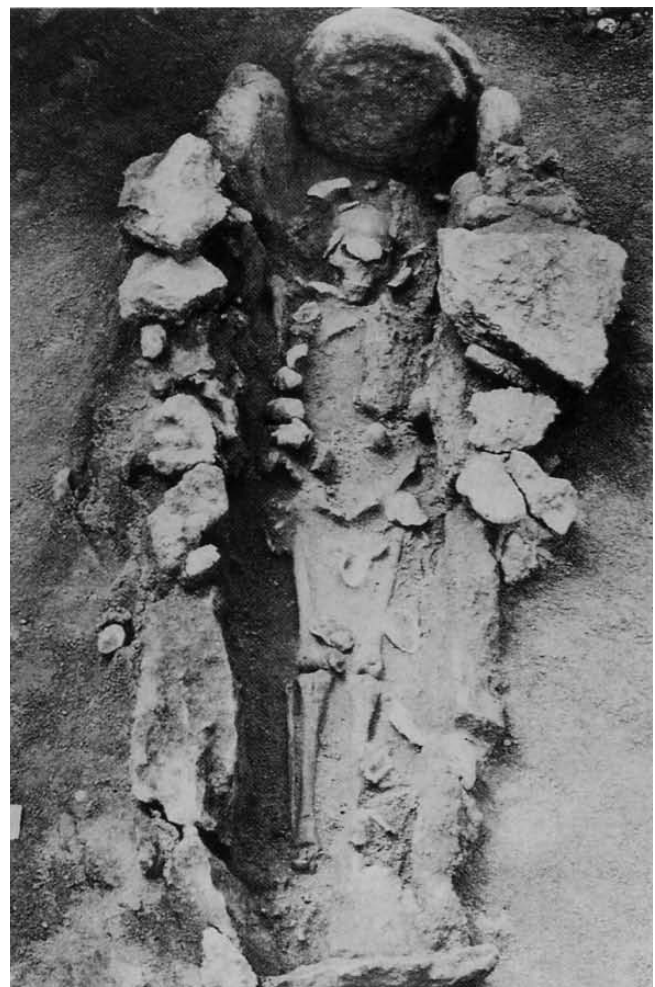
74 国指定史跡の渡具知木綿原遺跡、沖縄で初めて箱式石棺が発見され、注目を集めた。

読谷村の遺跡

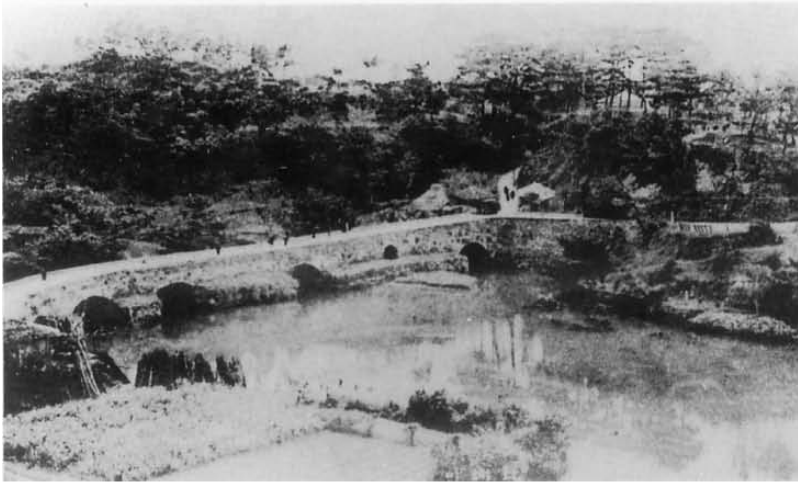
読谷村は比謝川河口から北に上り、東支那海に迫り出した残波岬を廻り長浜まで、ほとんどの地域に貝塚・遺跡が分布し、37地点を数える。古代人にとっても読谷の自然地勢は生活環境としてもかっこうの場所であったことがうかがえる。その代表的な遺跡が渡具知東原遺跡である。約6000年前の遺跡でヤブチ式土器を包含し、古い遺跡として沖縄でも代表的なものに属する。また、木綿原遺跡は1977年7月の発掘調査により約2000年前の遺跡であることがわかり、国指定の遺跡となった。弥生式土器や貝輪等を出土し、同時に箱式石棺を出土したことから沖縄では広く知られる遺跡である。1987年10月には長浜の吹出原遺跡から県内でも数例しか発見されてないジュゴン獣骨で作られた蝶形骨製品が約3000年の時をへて出土し脚光を浴びた。



75 沖縄では数例しか見ない、長浜吹出原遺跡から出土した蝶形骨器。



76 木綿原遺跡出土の箱式石棺と弥生人骨。読谷村立歴史民俗資料館に展示。



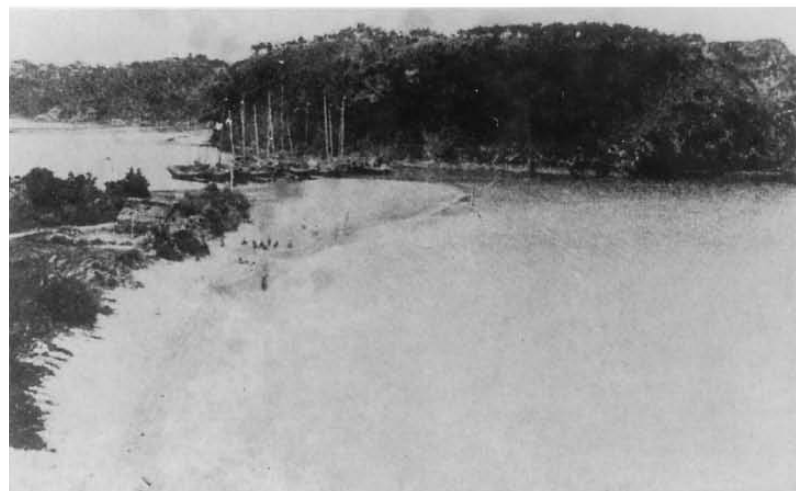
77 戦前の比謝橋の風景、嘉手納に
上るアマカーピラ、そしてマシ
チモーに名嘉病院が建った。

79 16世紀前半に渡具知メーヌハンタ
に建立された梵字碑。ア・ビ・
ラ・ウン・ケンと刻まれている。



78 1717年、比謝橋の改修を記念して建立された「比謝
橋碑文」。

80 山原船の停泊する戦前の比謝川の河口。
渡具知メーヌ浜と嘉手納水釜のヤラバ
ンタ（イユミーバンタ）。



読谷村の史跡

比謝橋近くに1717年に比謝橋の改修を記念して建立されたのが「比謝橋碑文」である。沖縄県はさきの大戦により多くの文化財を失っており、往時を語る石碑として貴重なものの一つとなっている。

また、渡具知のエーヌハンタに建設された梵字碑は読谷への悪疫・厄等のフーチゲシの役を担っている。

沖縄の音楽愛好家にとって忘れてはならない人物としてアカインコがいる。彼が昇天した場所として祀られているのが楚辺の赤犬子のお宮である。古代歌謡集「おもろさうし」にもオモロ歌唱者として名高く、三味線音楽の始祖ともされている。

その他には伊良皆のサシジャームイの尚巴志の墓、古堅小学校北側の阿麻和利の墓、大木の徳武佐宮、喜名の観音堂などが知られている。



81 オモロ歌唱者、三味線の始祖として崇められるアカヌクーを祀るお宮を建立。1956年（昭和31）

82 大木徳武佐の宮。今帰仁の高貴な武士が隠れたところで、徳があるとして拝んでいる。子宝にも恵まれるという。



83 約140・50年前に建立されたという観音堂と、農業神を祀る土帝君の祠。



84 勝連町南風原で発見された喜名焼瓶。
多和田真惇によって窯跡が喜名の観
音堂東で発見された。

ヤチムンと読谷山花織

高温で焼き絞められた荒焼を主体にする喜名焼は沖縄の陶業史では欠くことのできない焼き物である。そんな喜名焼も1682年に各地の窯場が壺屋に統合されることによって衰退してしまった。そんな歴史のある読谷に金城次郎氏を迎え、さらに金城窯の北に約7,000坪の敷地を確保し、9連房の共同登窯をもつヤチムンの里が開かれ、焼き物による独自の文化を継承すべく現在にいたっている。

一方、読谷山花織は15世紀頃に南方からもたらされた織物で、明治期にその織りの手法は途絶えたが、1964年に関係者の熱意により90年ぶりに幻の花織を復興させることができた。以来、花織事業組合の設立や伝統工芸センター、字工房の建設により文字通り今に開花している。

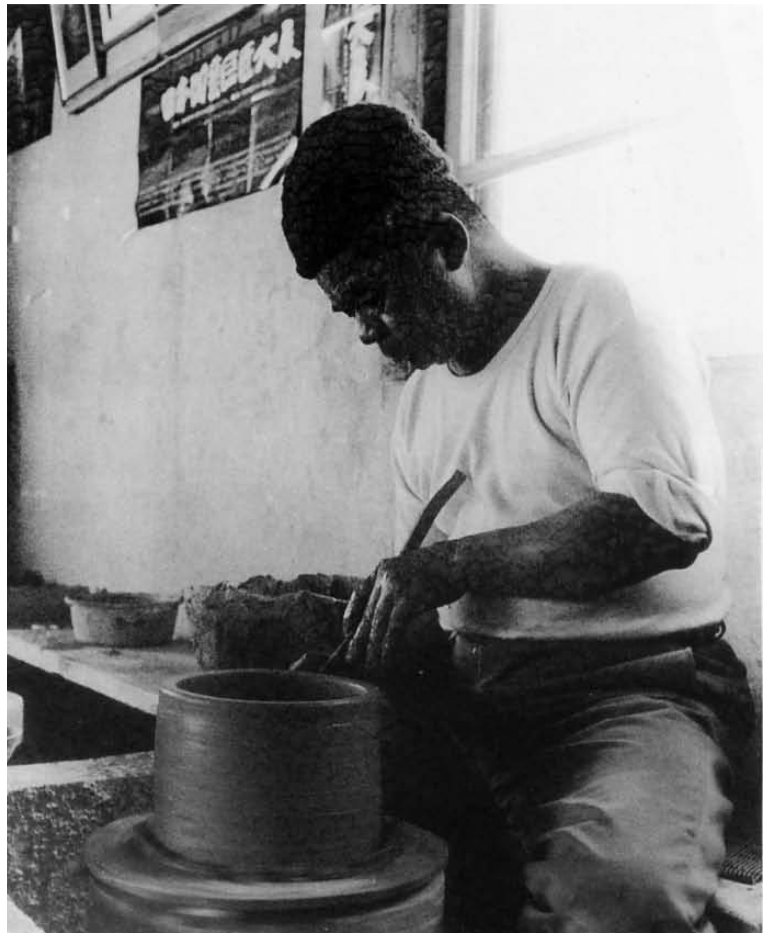


85 1979年（昭和54）座喜味横田屋原に9連房の大型共同登窯をもつヤチムンの里「読谷山窯」が開かれた。



86 1992年（平成4）ヤチムンの里の北側に「読谷山焼北窯」がオープンした。

87 1972年（昭和47）那覇市壺屋から読谷村に登窯を造り昨陶を続ける人間国宝金城次郎。



88 金城次郎の特徴的作品。線彫魚文壺
高39.6cm 経27.6cm。



89 登り窯に火入れをする金城次郎。



90 金城次郎の17歳の頃の作品。徳利
高12.4cm。経6.2cm。



91 読谷山花織の復興に尽力した一人、波平の武戸比嘉の上地ウシ（当時88歳）。1964年（昭和39）頃。



92 よみたんまつりににおいて「読谷山花織ファッションショー - 現代に甦える読谷山花織 - 」と銘打ち行われた。



93 花織りの継承発展に尽力する県無形文化財技能保持者の与那嶺貞。

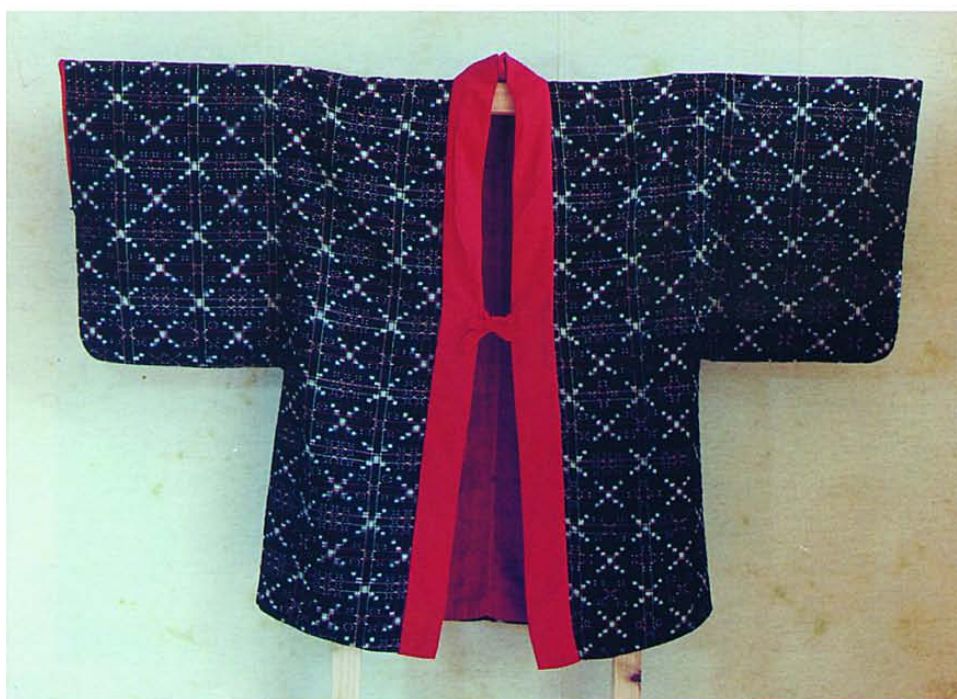


94 伝統工芸センターで行われている読谷山花織後継者育成事業。



95 読谷村伝統工芸センターは花織の後継者育成のため、1982年4月に開館した。

96 1984年（昭和59）3月、
花織の地域工房として
最初の楚辺花織工房が
完成した。



97 80～100年前に織られた読谷山花織のドゥーブク。